

## 随 想

### 不用意なことでもなく

林 文子

何故か私は（おそらく世の大方の人々も）、体調を崩したり、仕事が旨く出来ずに活動のリズムを乱したりすると、突如として頭脳一杯に「吾が人生観」を宿題のように思いだして慌て、鬱鬱としてしまう。

生まれ、生きることは大事なことである。創造の神様のおぼしめしに従ってこの世に人として生きる大事さを、あらためて思い直してみることになる。

話は遡るが、小学3、4年生になった頃（昭和11～12年）だったと覚えているが、近所の友達や幼いきょうだい達との遊びに飽きて、当時家から少し遠いと思っていた（たかだか1.5キロ）本屋に一人で出かけて行った。いつも店頭「のらくろ」マンガにはガキダイショウを中心に数人の男の子が群れていたの、やむなく店の中へ吸い込まれていった奥の棚には西田哲学の書物がずらりと並べられていた。ずっしり重い箱入りのその本を開いてびっしり詰まった文字の列の読めないのに驚いた。私でも読めるところを探したくなって、時々出かけては頁をやたらにめくりかえしていた。やがて本屋のおじさんに押売された。もっとも子どものお小遣いの程度に捨て値であったが。今も逗子の家の納戸(?)に残っている。54、5年たった今日このような哲学思想がどのように扱われているのか全く知らない私は、著者「西田幾太郎」の重々しい名に牽引されたまま、未だ難解な本に少々うとましく、目障りな気持ちで、とうとう書だなから納戸入りしていただいた次第である。

人間の本性として、ものごとをクリアカットに理解したい、納得したい、あるいは割り切りたい。潜在的ではあるが、この願望はとてつよかったと思う。知りたいという願望が学業に打ち込む始まりで、楽しかった。

ハイスクール（当時は高等女学校）に入ると、世の中が急におとな扱いをしだすので、本人達も背伸びをしておとならしく行動していた。初級の頃に「真理の探求」という言葉に魅せられて、漠然と学問をすることが人生で何よりも大切なことのように思われた。後には、社会教育者になって賢い女の子のお友

達を増やして、お父さん達のように自由で勝手な理屈を言って外を飛び歩きたいとも思っていた。

父親に懇願して当時は女の赤門（東大の代名詞）といわれていた女高師の文科（お茶の水女子大）に挑戦した。みごとに落とされた挙句に、当時の県知事のお達しとかいわれて、次の希望の女医専は受験できないことになった。あんなに悲しく暗い気持ちは、ひもじい思いをはるかに越えていた。

やがて軍需工場に挺身隊で動員され、あの空襲警報のさなか親友の石原篤子（今は眼科医）と水だまりの防空壕を避けて田圃の藁の山のなかに逃げていた。藁束に埋もれて将来の夢を語りあった。当時のこうまいな私達の理想は真理とは何か。まことを知るために学問するんだと、意気込んでいた。

人並に私の生涯も、学問による知的満足を求めて始まり、そして終わりたいと願った。

今日この頃の私は、充実していた吾が人生に満足している。とまれ、幸せを唱いあげるフィナーレを願っている。

(1992.12.28.)

(健康文化振興財団理事長)